

# 26PB-am184

## 注射用抗がん剤の使用実態調査と大容量規格の検討

○東條 真大<sup>1</sup>, 渡辺 享平<sup>2</sup>, 後藤 伸之<sup>1</sup>, 佐々木 忠徳<sup>3</sup>, 原田 幸子<sup>4</sup>, 松浦 克彦<sup>5</sup>, 山川 雅之<sup>6</sup>, 濱 宏仁<sup>6</sup>, 大津 史子<sup>1</sup>, 田辺 公一<sup>1</sup> ( <sup>1</sup>名城大薬, <sup>2</sup>福井大病院薬, <sup>3</sup>昭和薬, <sup>4</sup>北大病院薬, <sup>5</sup>愛知医科大病院薬, <sup>6</sup>公立甲賀病院薬, <sup>7</sup>神戸市医療セ西市民病院薬 )

【目的】厚生労働省によると平成 21 年度の国民医療費は 36 兆 67 億円であり、近年増加の一途をたどっており、医療現場においても限りある医薬品資源を適正かつ有効に使用することが求められている。一方、現在日本人の死因第 1 位はがんであり、がん医療の発展ならびに均霑化を国策として、多種多様な抗がん剤が全国の医療機関で使用されている。この抗がん剤は非常に高価でありながら個々の患者の体表面積や体重などに応じて投与量が厳密に設定されるため、抗がん剤調製に伴う余剰分は廃棄されているのが現状である。そこで現在、市場でよく使用されている注射用抗がん剤の使用実態について調査した。

【方法】全国のがん診療連携拠点病院 397 施設にアンケート調査し、回答の得られた 192 施設のデータをもとに、注射用抗がん剤の投与量について集計し、ヒストグラムを作成した。なお、アンケートの調査期間は 2014 年 10 月 1 日から 2015 年 10 月 31 日までの 1 か月間、対象薬剤は調剤件数の上位 10 薬剤である。

【結果と考察】対象薬剤すべてにおいて、既存するバイアル規格の 10 倍量を超える投与が存在することが判明した。1 日の調製量が増えるほど廃棄が増え、余剰な薬剤費が使われる。対象薬剤は調剤件数が上位 10 薬剤のため、調剤件数が最も多かった 5-FU は 1 日使用量も多く、件数が少ない薬剤ほど 1 日投与量も少なくなる結果を示した。5-FU に関しては既存バイアル規格の 10 倍量以上の投与が全施設で 31.5% 存在していることが判明し、大容量バイアル作成による医療費削減の可能性が示唆された。しかし、大容量バイアル作成にあたり、廃棄量の少なくなる規格の提案、薬剤の安定性や保存方法などの問題があるため、さらなる検討が必要である。